
突然トリップ inヴァンパイア騎士

蓮華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

突然トリップ ヒューヴァンパイア騎士

【Zコード】

Z1991Y

【作者名】

蓮華

【あらすじ】

ふと、目が覚めたら知らない場所にいた。

しかも体は縮んでいるし吹雪の中だしここはどこ！？って感じだけ
どそこで出会った子供を見た瞬間ここがどこかわかつた。。
なんでここにいるのかもわからないけどなんとかなるでしょ！！

これは「ヴァンパイア騎士」のトリップ小説です。

幼児化してますが、すぐに大きくなります。

注意：名前変換はありません。固定です。

תְּמִימָה . . . וְרִיאֵה (תְּמִימָה)

よのしへねがこしめかー。

・・・エリナ

私は、元々普通の学生だった…。

ちょっと人と違うことといえば人と違う事が出来る。一部では「陰陽師」「言霊使い」などと呼ばれたりしていたが

後は普通のビーハーでもこの漫画やアニメが好きな普通の学生だった。

そりゃあ自身が普通じゃない力を持っていたわけだからそれなりの「不思議」は現実にあるんだろうな。

くうこは思つていたよ？

だからって・・・。こんな規格外もいいところだよ！？

私は気がつくと白い世界にいた。

いや、よつは雪空の中にはただけなんだけどね！

なんでもいいのかわからない・・・。

わっさあまで部屋のベットで暢気に漫画を読んでいたはずなのに気がついたら雪の中って・・・！

誘拐！？人攫い！？まさかついに捨てられた！？

いやいや、いくらなんでもそれはないよね、うん。

雪の中で呆然としていると冷たい風が肌を出して思わずブルツッと

体を震わした。

あまつに寒さに腕を両手で擦るとふと違和感を感じた。

· · · · ·

· · · · ·

· · · · ·

なんか変 · · 。

皿身の体を見ると向かい一つもよつ小さこ氣がして · · ·

「 ひばりー？」

急いで皿身の両手を見ると記憶の中にある自分の手よつかなつ小さい事に気がついた。

急いで皿身の体を見るとせはつ小さくなつておつ · · · な、な、な

!!

ち、小さくなつておつ · · · !?

「 な、な、なにがよつなかつておつのーー! ?

その声もビリか幼かつた。

頭がパニックになる。

まずは、落ち着け！落ち着け！はい深呼吸！！

スーサースーサー・・・。

「・・・まず、状況確認が大事よね・・」

私はさつきまで、部屋で漫画を見てて、気づいたらここにいて・・。

んで、目が覚めたら体が小さくなっていた。

鏡がないからわからないけど、恐らく5歳ぐらい？と思つ。

・・・といふことかな？

つて全然意味わかんない・・。

「とりあえず・・・」にぎりといたら私　凍死するわな・・・

さつきから冷たい風が吹いてきて体が震える。

体が寒いし誰かくる様子も全然ないし、とりあえず歩くか・・・。

そのうち誰かに会つかも・・・とか会えたらいなー・・・。

そんなことを考えながらゆっくつと歩き出した。

ザクッザクッと自身の小さい足を進めていると小さい何かの影が
見えた。

「つー?誰かいるー?」

助かった!ーーとその誰かに向かつて急いで足を進めるとそれは子供でその子供の目の前には大人と思われる誰かがいた。

だけど、その人の様子が変だ。人の気配がしない・・・

「駄目っ！――」

私はその子に駆け寄つて庇つむつに抱きしめた。

子供に長い爪の手を伸ばさうとしているこの不気味な存在から・・。

ギュッと皿を粒つて衝撃を耐えようつと歯を食いしばつていると後ろから何かを切り裂くような音と共に悲鳴・それに何かが倒れる音が聞こえた。

「・・・？」

静かになつて不思議に思いそつと後ろを振り向くとそこには綺麗な漆黒の髪にダークグレイの瞳を持つ少年。

少年の足元には少年によつて倒されたと思われるモノがいてソレはサラサラサラと灰になつて塵になつて消えた。

そして少年の手は今消えたソレを攻撃した時についた血が付いていた。

少年は「ちひり」を向いて・・私を見て何故か一瞬目を見開いた。

だがすぐになんともなかつたかのようだ。その手に付いた血を舐めながら言つた。

「大丈夫？」

私と私に抱きしめられていた少女はその少年を見るだけしか出来なかつた・・・。

私は「」の一人を見て・・・理解した・・・。

「」は・・・。

「ヴァンパイア騎士」の世界なのだと・・・。

吸血鬼と守護係

あの後

私は警戒されると思つたけど何故か柩に警戒されることもなく子供：優姫と共に少年・柩に黒主灰闇の元に連れられた。

理事長（つて言つてもまだ理事長じゃないよね？）は私の捜索届も出したが何も音沙汰もなかつた・・・当たり前だけど・・・

結局、優姫と一緒に理事長の養女として迎えられた。

小さい優姫がもう可愛くて可愛くて可愛くて仕方がありますっ！！

もうやることなすこと可愛くて可愛くて可愛くて・・・

柩もまだ小さいのにかっこいいのよ！

だけど優姫に甘いのはすでにこの時変わらないよついで理事長に何度もからかわれて家に来たことか・・（笑

・・と思うんだけど柩が将来あんな性格になつたのは理事長にも原因があると思うんだよね！

それから零がやつてきたり色々あつたけどなんとか十年何事もなくすくじした。

それから十年・・・。

私と優姫と零は黒主学園に通っています。

今日も理事長に頼まれた守護係のお仕事頑張っています！－
ガーディアン

宵の刻ー「月の寮」前。

今日も普通科「ディクラス」の生徒が我らが麗しの夜間部「ナイト
クラス」に会いすべく月の寮の正面前に集まっていた。

それを抑えるのが私たち「ガーディアン」の仕事である。

「はいはいー下がつて下がつて！ ディクラスの皆さんはもう門限
ですから寮に帰つて」

「危ないから、ほら下がつて！」

優姫と一緒に頑張つて生徒を抑ようと頑張つているがそんな事でこ
この生徒が落ち着くわけもなく。

「じきなさこよ風紀委員ー！」

逆に押し通しきつよつとする始末・・・。

なんとも彼らに会おうとする女の集団とは怖いものである。

その時ガシャンと音が響いた。

彼女らに取つては最高の瞬間がやつてきてしまつたのである。

「 もやあつ・・・」

「 あれ・・・！」

生徒が何故こんなにも大騒ぎになるのかと言つとそれは・・。

ナイト・クラスがエリート集団であり、美形の集団だからである。

彼らは全員吸血鬼である。もちろん普通の生徒はそのことを誰もしらない。

知っているのは理事長と私と優姫と、そしてサボっていなければいい零だけである。

守護係としての仕事

「おはようー女の子達ー！今日も元気で可愛いねえ」

あーあ・。

私ははあつとため息をついた。

優姫を見ると藍堂先輩に呆れた顔をしながら立っている
と。

「　　「　　「　　「　　「　　「　　「　　「　　「　　「　　「　　「

「優姫！..」

優姫に駆け寄ろうとするところが優姫の傍にいた。

ドンッと興奮した生徒達によつて押された優姫が前のめりに倒れた。

「大丈夫かい？優姫。いつもご苦労様」

「枢先輩！」

優姫は驚いて顔を赤くすると急いで立ち上がつていた。

「はい・・大丈夫です！」

そんな優姫に枢はくすりと笑う。

「君はいつも僕に埋まっているね。少し寂しいな・・」

優姫はそれに慌てて手をブンブンッと振りながら答えた。

「あ・・・いや・・・だって、枢先輩は私たちの命の恩人ですから！！」

その時、ようやく優姫の元にこれた私は優姫に怪我がないか確かめてホッ息をついた。

「良かった。優姫怪我はないみたいだね」

「うん。大丈夫。ありがとうございます」

枢に向き直ると枢は私たちを見ていた。

「枢先輩・・お久しぶりです。それからありがとうございました」

「どういたしまして。一人とも気をつけてね。それから優姫、昔のことなら気にしなくていいんだよ？」

そういうて優姫の頭を撫でている枢の手をぐいっと突然割り込んできた零がその手を掴んだ。

つて、急に割り込んでてなにやつてんのよ零はっ！

「授業が始まりますよ。玖蘭先輩」

二人の間に険悪なムードが流れる・・・。

「うひ、零ーーやめなさいーー！」

私が零の胸倉を掴んで零に声を張り上げると零はひるみと私を見た
かと思いつひ

「ちひーー。」

舌打ちしたかと思ひとその手をバシッと離した。

「なーーにーー舌打ちしてんのよーー。いきなり入つてきたかと思ひたら
何やってるのよーー？謝りなさいーー！」

そういう私を無視してそのまま歩いていった。

歩きながら、周りの生徒に一喝するのを忘れずに。。。

「はあ・・・つたぐ何やつてんのよ零は・・・つてこつか何をじこき
たのよ」

そこまでもカランペイアが嫌いか。。。まあ零の場合仕方がないんだ
わづかぢ・・。

枢先輩はくすりと笑うと私たちに向かつて

「それじゃあ一人とも頑張つてね

そういうと他のナイトクラスを伴つて歩いていった。

そして私たちも残っている生徒達を寮に帰すとその場を後にしたの
だった。

身体年齢 + 精神年齢は？

月の寮でナイトクラスが授業を行つてゐるだらう頃、私は夜の見回りを行つていた。

優姫や零とは別で見回つてゐるため今は私一人だ。

見回つていたけどちよつと疲れたので一休みしよう。

うん。ちよつとすくべ近くに座れるところあるし・・・。

そう思つて私はどこかの建物の屋上に座ると空を見上げた。

今日も満点の空で星が輝いてゐる。この辺りは真つ暗だから星が綺麗に見える。

はー、綺麗だなー・。

・・そういうえば、そろそろ原作が始まつたから色々考えないといけないな・・。

つて言つてもあれから10年たつてゐるからそろそろ原作の記憶が色々忘れかけてやばいんだよねー。

ふと思い出したることはあるし内容も全然覚えてないつてわけじゃないんだけど、細かいこととかは最近正直やばい・・。

もう年かなー・・。つてはつー・?

・・・確かに、私がこっちに来たのが19歳でこっちにきたときも5歳ぐらいになつていて、現在が16で・・・つて事はだ・・・。

「・・・私の精神年齢つて・・・30歳!？」

くらひつと思わず眩暈が起ひつた・・・。

30・・30つて・・・(泣)

はあ・・・。

考えなきやよかつた・・・。今更後悔。

ショックで落ち込んでいるとガサツとどこからか僅かに音が聞こえて起き上がつて上から下を覗き込むとそこには生徒が一人。

「・・・夜歩きさんはつけん・・・」

めんどくさいなーつと思いつつもやつさのことは他所に置いて守護係の仕事を真つ当するべくそこに向かつて飛び降りた。

そんなに高くなかつたし、こっちに来てからも色々鍛えられているしね。

それに・・・こっちに着てから使つたことないけど「言靈」の力もあるし・・・え。忘れてたつて?

そんなどないよ?ちゃんと覚えてたよ。使つてなかつただけでつ
!!(誰にいってんだ?)

夜歩きさん。

木を伝つて地面につくと生徒を見ると生徒は驚いた顔をしてこゝちを見ていた。

「あなた達！クラスと名前を言つて！夜間の外出は校則で禁止されています！夜は危ないわ。早く寮に帰りなさい！」

ピツッと腕に巻いている守護係の証を見せながら言った。

「ナイトクラスの方の[写]真を取りに来たのよ。いいじゃない少しくらい」

そういうて罰の悪そうな顔をする彼女たちを見ていた私は一人が膝に怪我をして血が出ているのを気づいた。

「つーー怪我をしているの！？血はまずいわ・・・早く寮も帰つて！..」

グイックとそこたちの肩を押して急いで変えそうとするがまつと後ろに二つの気配。

「誰ー？」

スカートの裏に隠してあつた、武器（優姫と同じ場所！）を取り出すとそれを一人に向かた。

この武器は「無限ームゲン」とい、使用者の望む武器に姿を変える特殊な武器だ。

ちなみに今は優姫と「狩りの女神—アルテミス」と同じ形の武器だ。

後ろの気配の一人、架院先輩の片手にそれを掴まれた。その後ろには藍堂先輩がいた。

「おつかねえ・・・さすが理事長仕込み」

「ナ・・・ナイトクラス・・・ 架院暁先輩！藍堂英先輩！やだうひつ・・・」

私の後ろにいた女子生徒が喜びと声をあげるが今の状況で彼女達のように喜べる状態ではない・・・

田の前のキツツと睨み付けるかのようみ見ると一人は肩をすくめた。

「そんなに睨まないでよ。あーあ、ちょっと血の匂いがしたから見に来ただけなのに。酷いよ 蓮華ちゃん」

「ほんと・・・ついに見にきちゃつただけなのこあ・・・」

その時、ふあと風が吹いた。

まずい。血のにおいが・・・！

しかもよつともよつてその風は田の前の一人のいる方に吹いている。

「あ・・・いい匂い・・・」

くんつひとつ藍堂先輩が流れてくる血の匂いを嗅ぎつけた。

藍堂先輩は手を細める。

「ああ・・キミの血か・・」

グツツと無限を掴む手に力をこめる。

「藍堂先輩！彼女達に一本でも指を触れたらお仕置・・・き

そういうて警醒けいせいしてくると藍堂先輩が私の無限を掴む手をやつと掴んだ。

「一・?」

「いい匂においって血けのは・・」

そういうて私の掌を上に向ける。

「キミの血だよ・・・蓮華ちゃん・・・」

「それせばいいだつーーー！」

・・まあーーわざ降りたときこびりかでーー

グツト掴まえる無限を引っ張ろうとするが強い力で引っ張られて
いて動けない。

「・・・くつーー！」

まあこーーまだこーにはティクラスの子達が・・・

「ん――、ホント・・・やるな・・・としても」

そういうて私の血が出ている掌に爪を立てる藍堂先輩・・・。

「あひ、吸血鬼!?

「やだ、そんなのいるわけ・・・」

その藍堂先輩の姿に顔を引あひせらる女子生徒。

まづい!..

「先輩だめです!藍堂先輩!..」

なんとか止めよひと声をかけるが藍堂先輩は聞く耳持たず・・。

「・・・むつと欲しいなあ・・。首からいただいていい?」

そういうて口から私の血を流しながら、藍堂先輩に耐え切れなくなつたのか女子生徒が失神した。

その私達の様子を呆れたよつて院先輩がため息を付いていた。

「だめです!あげられません!といつか架院先輩求めてください!」

その時どこから現れたのか零が自身の武器である「血薔薇の銃一ブラッティローズ」を藍堂先輩の米神にあてた。

「学内で吸血行為は一切禁じられている。血の香りに酔つて正氣を失つたか吸血鬼」

「零ダメーー！」

「くえ・・・でももう味見しちゃった」

藍堂先輩はそれに口に付いた血をふき取りながらこいつた。

「まやこーーー！」

「零ーーー！」

ドンッ！との場に銃声が響いた。

私はなんとか零の銃をもつ手を上に上げる！とに成功して安堵の息をついた。

「びつ、びつくりしたーーー！」

「ばか！ほんとに打つなんて何考えてんのよーーー！」

零が撃つたその銃の弾はちょうど 架院先輩がいたその木の後ろに当たつていた。

「・・・おじおじ」

それを架院先輩が冷や汗を流してみていた。

枢先輩の登場！

「その『血薔薇の銃—ブラッディローズ』……おさめてくれないかな」

コツツツと僅かに足音を立てながら枢先輩が現れた。

「僕らにとつてそれは脅威だからね……それとこの痴れ者は僕が預かつて理事長のお沙汰をまつ」

グイツツと藍堂先輩の襟首を掴んで言いつ枢先輩。

「玖蘭寮長つ・・・

「いいよね錐生くん」

「零・・・」

私が零を見ると零は機嫌悪そうに答えた。

「・・・連れて行つてください・・玖蘭先輩」

それを聞くと枢先輩は今度は架院先輩に向く。

「架院、なぜ藍堂を止めなかつた？君も同罪だ」

頭を抱えている架院先輩だけど・・・うん。同罪だね。私止めてつていったのに止めなかつたし傍観してただけだしね！――

「蓮華。 そちらの生徒の記憶はどうある？・・・」 そちらで？

話かけられてはつととした私は枢先輩に向き直った。

「いえ。 大丈夫です、 理事長が今夜の記憶は無かつたことに・・・。
かわいそうですが・・・」

ちらつと女子生徒を見る。

「もう・・・じゃ、 後は頼むけど・・・。 怖い思いをさせてごめんね。
蓮華。 大丈夫？」

心配そうに私を見る枢先輩に私は笑った。

「大丈夫ですよ。 少し齧られただけですし、 もう血も止まっています
から！」

「そう、 よかった・・・それじゃあね」

そうやせしく笑って帰つていく枢先輩・・・と藍堂先輩と架院先輩だ
った。

ふう・・・と一息ついていると他のところを回つていた優姫がこち
らに走ってきた。

「蓮華！？ その手どうしたの！？ 怪我したの！？」

私の手を見て慌てている優姫に大丈夫って伝えてさつきのことを説
明しつつ部屋に戻った。

聖ショーラトルテー

わしゃしゃしゃしゃ、嘘うそをせぬいゝやれ二十九一一

今日は女子にとつては待ちに待つた日でござりますーー！（誰！？）

（一）

そう、今日は2月14日！聖ショコラトルデー！（バレンタインデー）

と、言うわけで今日は朝から女子生徒が「月の寮」の正門前に詰め掛けているんです（汗）

彼らはヴァンパイアなので陽が出てこない時間帯は出でられないはずもないし今頃寝ている時間帯だろ？

そんな時間に女子生徒が門の前に居ると言つことは守護係である私たちまでもがそれを止めにこなくちゃいけないわけで……。

うん。正直にこうとめんどい……&眠い……

私ね、低血圧で朝は駄目なんだよ！

朝っぱらから疲れるようなことをやせらるな！って思つむつと…

若い子には30過ぎたおばちゃんは付いていけないよもつ・・・はあ。（結局一日考えていた人）

そんなことを考えていたら門の壁に上って笛を吹いて女子生徒を止めている優姫を見る。

優姫がんばってるな……。

私はそんな元気が朝から出るわけもなくボーと見ているだけ……。
ところが、優姫。キミは彼らがヴァンパイアだつて知っているんだ
から寝てることもわかつてゐよね？

そこを止めるためとはいえそんなに勢いよく笛を吹いぢやつて……
。夜中に外で騒がれているみたいなもんだよ？

迷惑だよね。そことのひわかつててやつてるの？

・・・あ～・・・駄目だ駄目だ・・・。

朝からこんなことをわせられてイライラして優姫に当たつてしまつてゐなあ……。

・・・んじ、教室いって授業始まるまで寝るか……。

そつ思つと後ろで騒いでいる女子生徒と頑張つてる優姫を置いて元着た道を戻る。

「あ――――――ちよつと蓮華――ビ――のみのへ――手伝つてよ――」

ひゅうひゅう帰る私を見つけた優姫は叫ぶはそれにヒリヒリと手を振つ

てその場を後にした。

心の中で優姫と後から駆けつけた零に声援を送つて・・。

がんばれ、一人とも私は寝る！－！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1991y/>

突然トリップ in ヴァンパイア騎士

2011年11月17日19時49分発行